墓じまい

大森　海太

私の祖父母の出身は三重県の山奥で、伊勢の津市と伊賀上野を結ぶ国道の分水嶺（長野峠）を伊賀側に下った過疎の村である。村唯一の寺の裏山は墓場になっていて、一人一本づつ小さな墓碑がたち、また以前は隣接した焼き場があって、薪で一晩かけて遺体を骨にしたそうだ。

高校二年のとき父が亡くなり、母は千葉県松戸の都営八柱霊園に墓を設けて骨を納めたが、一部は分骨して伊賀の墓地に葬り小さな墓石をたてた。その後、祖母叔父たちや母が亡くなったときも、同じように分骨して伊賀の田舎に葬った。

しかし伊賀は遠いので滅多に訪れることはなく、彼岸や盆暮れにはマイカーで八柱に墓参りしていたが、いづれ免許も返納しなければと考えていたところ、五年ほど前、カミサンが近所の寺で都会型の墓の募集があるのを見つけてきた。

寺の本堂の改修にあわせて建てられた立体倉庫のような所に骨壺を収納し、個室の祭壇でカードを挿入するとコンベアに乗って壺が目の前に現れるという仕組みで、おまけに死んだら焼き場の手配から通夜、葬式の段取りまですべてやってくれるとのこと、そのうえ宗派も天台宗ときたらこれに勝るものはない。

我が家からも歩いて来られるし、ここなら死んだあとでもたまには子供や孫たちが来てくれるだろうということで、早々に八柱を墓じまいして立体倉庫に移転した。

いっぽう伊賀の墓については、トシをとったら足腰も弱るし息子や甥は行ったこともないし、弟とも相談して二年前ふたりで現地に赴き、心ばかりの永代供養料を寺に納めて、これまた墓じまいをすませてきた。

（そんなわけで最近、地方では無縁墓が増えて問題になっているそうだ）

それはともかく私としては問題解決、これでいつでも安心して死ねるなどと心にもないことを呟（つぶや）いたりしながら、散歩のついでに雑司ヶ谷や染井の墓地に通りかかると、大きな木が茂って緑が濃い。うーむ、こういうところで永久（とわ）の眠りにつくのも悪くない、なんて思ったけどもう遅い。

（八〇九字）